



Half & All

mon

土曜日。人気のない西新宿のビル街は、女が出て行ったばかりの部屋を連想させる。

しかし日曜になれば、街は次の週の日常に向けて動き始め、たちまちそのイメージは掻き消されてゆく。

〈オサム。タイムライン 現在〉

オサムはその限られた土曜日という一日を、街を歩いて過ごす日に充てている。新宿からの多少の人並みを除けば、オフィスばかりが入っているビルの群れは恐ろしく静かで、ほとんどの店がシャッターを閉じている。

週に一度だけ訪れる、その束の間の静寂の中を、オサムは一人きりで歩く。それは「散歩」と呼ぶには、余りにも個人的過ぎる歩行であり、「観察」と呼ぶには、余りにも集中力を欠いている。

一種の「儀式」のように、ビルの周りを徘徊するオサムに、声をかける者は誰もいなかったし、オサムから誰かに声をかけることもない。

もっとも、オサムの外見を見ただけで、すれ違う人々は自然と道を開け、目を合わせようとしなかった。濃い色のサングラス。その上からでも窺える、鋭い眼光。仕立ての黒のスーツ。背の高さも凄みを加えている。

オサムのような中堅のヤクザが、こうやって街を一人で歩くことは珍しいことだ。堅気のような格好をすれば、いくらかは違ったかもしれない。犬でも連れて歩けば「犬の散歩をするヤクザ」に見えたに違いない。

あいにくオサムはそんな服を一つも持っていなかったし、犬も飼っていない。そもそも、この「儀式」に相応しいのがどういう格好なのかもよく分からない。

結局オサムは「お仕事」と同じ格好で歩き回っている。二、三時間ほどそれを続けてから、オサムは成子坂にある自分のマンションに戻る。いつからかは思い出せないが、随分と長いこと、それがオサムの習慣になっている。

どうしてそんなことを続けるのか、オサム自身にもわからない。しかし、歩かない訳にはいかないのだ。つい一日前まで、活気に満ち、「流れ」の中にあつた街が、ふいに立ち止まる。そのときに生まれる慣性のような力が、女が出て行った部屋を思い起こさせるのかと、オサムはなんとなく考えている。

ただいつもイメージの中で出て行く女は、決まってユリだった。ユリは二年前に、オサムの元から消えて行ってしまった。消えた女なんて、数えきれない。中には名前も思い出せない女や、存在していたことすら忘れていた女だっている。忘れてることさえも、忘れ去っている。

オサムはユリが出て行くのを、直接見た訳ではない。ただテーブルの上に置き手紙がしてあって、つらつらとオサムを非難する言葉が並べられていた。一体どうやったらこんなにも沢山の言葉を選べるのかと、感心した程だ。手紙の中のどの言葉も、意味するものは同じだった。

「あなたの心が、もう見えない。」

いくらそう言われても、オサムにはユリの気持ちが理解できなかった。知る必要もないと思った。心というものが何処かに存在しているとして、その繋がりを重要だと考えているならば、繋がれない相手と離れるのは、ひどく自然なことのように思えた。繋ぎ止めておく努力をする必要が、どこにあるのだ？

頭ではそう考えていても、出て行く女のイメージが、毎回ユリだという事実だけをみると、ユリを愛していたのではないかとも思える。ただそれは、状況がそう思わせるだけであって、オサム自身がそう思っていたという確証はない。だいたい「愛」なんてものを考えていられるほどヤクザの世界は悠長なものではなかったし、オサム自身も、それについて深く考えようとしたことはない。

「愛」に何か重要な意味があるとして、土曜日に意味もなくビル街を歩き回る理由が分かるのだろうか？あいにくそれを知らなくてもいいと、オサムは考えている。

熱いシャワーを浴びて、数時間分の汗を洗い流す。これから「お仕事」だ。この世界に定休日なんてない。無理を言って、土曜日の決まった時間をもらえるのは、オサムが組長に一目置かれている存在だからだ。そのことで、オサムを妬んでいる幹部の奴らもいたが、オサムにとって、そんな奴らは出て行った女たちと大して変わりはない。ただ、繋がれないだけだ。

「真珠貝」

ヤクザの世界で、オサムはそう呼ばれている。どんなに脅されても、泣きつかれても、オサムは何も言わず、ただじっと相手の目を睨む。殴られても、ただ相手を睨み続ける。そのうち、わめき散らしていた相手は、次第に我を失っていき、最後には逃げ出すか、大人しくなってしまう。いつしかオサムにそのあだ名がついていた。

周りからは恐れられ、組長からは一目置かれるようになった。どんどんオサムは出世して、今では組の幹部にまでのし上がった。他の組とのいざこざや、誰にも手に負えないような問題が持ち上がると、必ずオサムが呼び出された。そしてそのほとんどをオサムは解決することができた。最後はいつも、相手が根負けして折れてしまうのだ。

しかしオサムは、そんなことも、どうでもいいと考えている。自分の才能が活かせる場所が、たまたまヤクザの世界だけだったことだ。

ソファの真ん中に座り、タバコに火をつける。もうすぐシンイチから電話がかかってくるだろう。



「兄貴、下に車つけましたんで！ いつでも降りてきてください！」

シンイチは、ユリが出て行く少し前から、オサムの下についている舎弟だ。東北の生まれで、いまだに訛りが抜けないところがある。中学もろくに行っていないようなチンピラ風情だが、オサムのことを神のように尊敬し、周りの下っ端たちにも自分のことを言いふらしているらしい。オサムはそのことを特に咎めもしなかった。好きなようにさせていた。

オサムが何も話さなくても、シンイチは機関銃のようにいつも喋り続けていた。

昨日どここのシマでいざこざがあったとか、新しい女が店に入ったから見に行ったらとんでもなく美人で、いつかモノにしたいんだとか、こっちが聞いているか聞いてないかなんて、お構いなしのようなようだった。ラジオでも聞くように、オサムはシンイチの言葉をいつも聞いていた。

なぜか、シンイチの声はオサムを落ち着かせた。一度でも嫌だと感じていれば、「黙れ」と言ったに違いない。シンイチの声を通してオサムは、ヤクザの世界とそれ以外の世界の近況を知ることができた。まるで瓦版を読んで聞かせるように、シンイチは話し続けた。江戸時代ならば、シンイチはヤクザにならずに済んだらうに。オサムはよくそう考えた。

テーブルの上の携帯が、振動と発光を同時に繰り返す。

「兄貴、下に車つけましたんで！ いつでも降りてきてください！」

シンイチの声が瓦版を読む。これから事務所に行って、組長と昼食をとる。煩わしさなんて、会社勤めもヤクザも、そう変わらない。ただ違うのは、スーツの裏に銃を持ってるか持っていないかだけだ。オサムは、携帯の側に置いたベレッタを手に取り、安全装置を確かめる。

次の土曜日までには、まだやらなきゃいけないことが山ほどある。

〈ユリ。タイムライン 過去〉

金沢へ向かう深夜バスの中には、ユリを入れて八人の客しかいない。そのおかげでユリは、荷物を客のいないシートに置き、誰からも話しかけられずに、窓の外を眺めることができた。

ユリが座っている席の窓からは、方角的に、日本アルプスの山々が見えるはずだったが、漆黒の闇に包まれたその時間帯では、何一つ視界に捉えることはできない。乗客の眠りのために、バスの中の灯りも消され、高速道路の、オレンジ色の街灯だけが、定期的に前から後ろへ流れていく。

ユリが携帯電話を開く。「3：50」という数字が白い画面の中に浮かんでいる。数字と数字の間の「：」だけが、流れゆく街灯とリンクして点滅を繰り返している。メールも、着信もない。もっとも、オサムがメールなんて送るとは思えなかったし、電話なら尚更だ。

「もう終わったことよ」ユリは誰にも聞こえないくらいの声でそう呟いてみる。ユリの言葉と共に放たれた息で、口元の窓が白く曇っていく。闇に潜んだ日本アルプスの雪だけが、そこに姿を現したかのようだ。

成子坂のオサムのマンションに、置き手紙をしたその足で、ユリは新宿発の深夜バスに飛び乗っていた。会えば決心が揺らぐからという気持ちもあったが、もし会っていても、オサムは何も言ってはくれなかっただろう。もうこれ以上は、オサムの側にはいられなかった。

一年ほど前、ユリが働いていた新宿の高級クラブに、オサムはやって来た。ヤクザもそういうクラブに出入りするクラスの間人間になると、皆紳士だった。柄の悪い、チンピラのような奴らは一人もいない。毎回店が気を遣って、人目につかない個室を必ず用意する。その店のある界隈は、オサムの組が仕切っていた。その夜も組長と幹部たちが飲みに来ていた。その中にオサムも混じっていて、個室のソファの端に一団から少し離れて一人で座っていた。

店に入って間もないユリだったが、上のクラスのヤクザの相手をするのは得意だった。彼らに対しては質問をする必要がないのだ。何をやってるかは一目瞭然で、仕事のことを掘り下げて聞くのは暗黙の了解で、タブーとされていた。そして、どこかで自分たちのことを、隠そうとする習性が彼らにはあった。だからだいたいユリは、毎回自分のことを質問されることになった。仮にそこで嘘をついても、彼らはそれ以上は踏み込んで聞いてはこない。嘘の世界に、自分たちも女たちも生きていることを知っているからだ。その絶妙に距離をとる会話が、ユリはとても得意だった。そこはビジネスの場で、女たちは、自分たちに利益をもたらす商品であるという意識を、彼らは徹底している。

その夜、ユリはオサムの隣に座ることになった。氷を入れたグラスにウイスキーを注ごうとすると、オサムがそれを止めた。

「アルコールはいらない。何か匂いのない飲み物を。」

そう言われて、ユリは何か奇妙な感覚をオサムに対して覚えた。他のヤクザと違う感触。それはやがて好奇心になり、ユリはいつも守っている距離を保てなくなる。

「匂いのない飲み物って例えば？ 私の知っている限りでは、それは水しかないわ。」

「じゃあ水にしてくれ。俺も水のもりで言ったんだよ。」

「じゃあ最初から水って言えばいいじゃない。変な人。」

周りの女たちの顔が凍りつくのが分かった。次に何が起こるのだろうか、会話の後の沈黙に耳をそば立てている。

「オサム、お前変なこと言うんじゃないよ。その子だって困っちゃうだろうが、そんな言い方されたら。まったく変わった奴だ。」

組長の言葉で、空気が元に戻る。女たちもそのことを安堵するかのよう、皆が笑う。

「すみません」

そう言ったきり、オサムは一言も口をきかなかった。ユリも黙ってオサムのグラスに匂いのない水を注ぎ続けた。

ユリはその後、こっぴどくママに怒られたが次の日、オサムが一人で店にやって来て、ユリを指名したことで、ママの怒りも何処かへ行ってしまったようだった。

同じように、オサムは無口で、水しか飲まず、会話らしい会話はほとんどなかったが、「行こう」というオサムの言葉にユリは逆らうことが出来なかった。どうしてなのかは、今でも分からない。その日、オサムのマンションに行き、寝た。恐ろしく静かなセックスだった。

ただ、こうなることは決まっていた、抗えない力が確かにそこにはあると感じていた。少なくとも、ユリは。

「もう終わったことなの」

もう一度ユリは、さっきよりも少しだけ大きな声でそう言ってみる。二つ前に座っているサラリーマン風の男の頭が、ユリの声で僅かに動いた気がしたが、それも気のせいだろう。眠りが浅いので、身体が常に少しだけ動いているだけだ。ユリに眠気は訪れない。多分これから先、死ぬまで眠気は訪れないかもしれないとも思える。

もうすぐバスは最後の休憩所に停車する。その時にもう一度だけ山の方を見よう。夜明け

の光が僅かでも差し込んで、輪郭だけでも見る事が出来たら、オサムから連絡がくるに違いない。

そこまで考えて、ユリは首を振る。バカバカしい。もう終わったことなんだからと。

午前四時を回っても、辺りは漆黒の闇に包まれている。夜明けはまだ訪れない。

〈アカネ。タイムライン 現在〉

新宿区役所の、目の前の通りに、俄かに人が溢れ始める。店を出て客を捕まえようとするホストたちと、その男たちを物色する女たちが集まって、異様な光景を作り出す。車道の真ん中を、我が物顔で歩くホストたちは、そろって皆が同じ形のスーツに身を包み、髪型ばかりを気にしている。女たちのほとんどは、キャバ嬢か風俗嬢だ。

金の捨て場所を探して、男たちに声をかけられるのを待っている。

歌舞伎町で男の下半身から吸い取った金が、また同じ歌舞伎町で男たちの下半身へと還っていく。バカみたい。この街の全部。本当にバカばかりだ。アカネはそう思いながら、その光景を店の中から眺めている。そして後ろに一つに縛った髪をほどいて、もう一度結び直す。真っ黒な髪は染める時間がないからそうっただけで、一つに束ねるのは単に作業がしやすいからだ。

いくらアカネが見たくないと思っても、その時間帯には花が売れるので、店は開けておかなければならない。軒先に並べられた、ど派手な色の花束を、男たちも女たちも、ろくに見もしないで買って行く。この街では白い花なんて売れない。真紅や、ピンク、ゴールドに、人工的に染められた花を皆が喜ぶ。

それが彼らの愛の色であり、より高い金をかけることが、愛する人への礼儀だと本気で信じている。

アカネがこの店を開いて、もう五年が経つ。以前この建物のオーナーだった占い師の女と、たまたま知り合い、気に入られた。占いの店を畳むから、ここで花屋をやらないかと言われた時は、正直嬉しかった。八畳ほどの小さな敷地ではあったが、自分の好きな花を仕入れ、好きな花を飾れるというのは、魅力的だった。誰にも気を遣わず、誰の許しを得る必要もない。

しかし店を始めて一週間で早くも、アカネはこの街の現実を突きつけられてしまった。自分の選んだ花が売れない。作る形も色も、初めから全部決められている。

しばらくすると、オーナーだった占い師が行方不明になり、ビルの所有権が転々とした。人が突然行方不明になることも、この街では日常茶飯事だった。最終的に、この街を仕切っているヤクザの手に渡ったが、売り上げの二十パーセントを「上納」することで、アカネは商売を続けることを許された。

その頃には、アカネはもうどうでもいいと思っていた。なるようになるしかない。

失踪した占い師の女は、アカネが最後に会った時アカネに言った。

「あんたには大事な役目がある。それを果たす時を、見逃すんじゃないよ。」

しかしいくら考えてみても、この街に自分の役目なんてあるとは思えない。見逃すならそれに越したことはない、アカネは思っている。



バラのオケの水を取り替えていると、常連のホストが、髪をいじりながら店に入ってきた。

「ヤッホー、アカネちゃん。元気ー？頼んでた花束できたー？」

アカネは何も言わず、冷蔵庫から赤いバラだけで作った花束を取り出す。表面には薄く金粉が振られている。

「ヤベー、チョー綺麗じゃん。しのぶは赤いバラしか興味ないって言ってたしー、誕生日にサプライズで渡せば泣いちゃうよ、あいつ、きつとー。」

「税込みで一万と五百円。」

「あ？あー、金はさ、店につけといてよ。店の名前わかんでしょ？」

「うちはツケはやってないの。払わないんならそれ返して。タクもバラの花束が欲しいって言ってたからちょうどいいわ。回しちゃうから。ほら、早く。」

「わかったよー、冷てーなーアカネはさ。払えばいいんだろ、払えば。ほら。」

「あんたに呼び捨てにされる覚えなんてないわよ。そのしのぶって女だけ呼んでりゃいいでしょ。」

「あいにくさー、呼ばなきゃいけない女がたくさんいてさー、忙しいのよオレも。じゃあさ、領収書だけ店にまわしといてよ。接待交際費ってね。頼んだぜ。じゃあねー、アカネー。」

アカネは何も答えない。舌打ちして出て行くホストと入れ替わりに、背の高い、黒のスーツに身を包んだ男が店に入ってくる。

「あ、オサムさん」

オサムが軽く手を上げる。

「ちょっと寄っただけだ。」

「そう。まあゆっくりしてってください。って言ってもこんなに狭くちゃね。」

「いいんだ。気にするな。」

オサムは棚の上に置かれた、百合の花を一輪手にとる。

組長さんは元気？今度花を事務所に届けますって言っててね。なかなか忙しくてさ、こうやって派手な色に塗らないと売れないから手間がかかるの。花だって、まさか自分が金色に変身するとは思ってしなかったわよね。きっと。それが運命だって、花でも感じるのかしらね？」

オサムはそれには答えなかった。そして百合の花をオケに戻すと、アカネの方にゆっくりと向き直って言った。

「アカネ。ひとつ頼みがあるんだ。」

〈ウサギの夢。タイムライン 現在〉

「穴は見つからないよ。いくら探したって無駄さ。あんた一人じゃダメなんだよ。」

ウサギは、夢の中でオサムに言う。オサムは何かを言い返そうとするが、どうしても声が出てこない。夢の中で喋れるのは、ウサギだけというルールらしい。

ヤクザだって夢くらいは見る。オサムとそのウサギは、夢の中で誰もいない街を歩いている。土曜日にオサムが、一人で歩き回る西新宿のビル街に、似ているような気もするし、それとは違う、全く知らない街のような気もする。

遠くの景色は、ひどく輪郭がぼやけていて、灰色に見える。ただそれが灰色なのかどうかは定かではない。夢の景色なんて、そんなものだ。

オサムとウサギが歩いている道だけが、霧を晴らすように、灰色らしき世界を区切っている。一つだけはっきりしているのは、街の信号がすべて赤のままということだけだ。色の判別が難しい世界にあって、信号の赤色だけが、やけにくっきりと、灰色らしき世界で点灯している。

それはまるで、オサムの横を歩く、ウサギの眼のように見える。無数のウサギの眼が、オサムを見ているような気がする。

このところ毎日のように、オサムはそのウサギの夢を見る。

「穴は入り口でもあり、出口でもあるんだよ。もちろん、穴の先には出口がある。でも向こうから見たら、そこは入り口なんだ。」

ウサギはどうしても分からないが、声を殺して小さな声でそう囁く。オサムにはウサギの言っている意味が、全く理解できなかったが、それを聞き返すことができないので、黙って次の言葉を待っている。

ウサギは二本足で歩き、タクシードのような服を着ている。左の耳が、右よりも少し短い。首に時計さえ掛けていたら、「不思議の国のアリス」のウサギそのままなのだが、あいにく時計は持っていない。それが理由かどうかは分からないが、ウサギはとてもゆっくりと歩いた。決して慌てたりはしない。言葉と言葉の間隔も長いので、オサムは次の言葉を聞き逃さないように、集中し続けていなければならない。

「別に穴なんて探しちゃいないって、あんたは言いたいんだろう？ あんたにとってはこの世界で起こること全てに、意味はない。そういう風にしか考えられないと信じてる。間違いだとは言わないよ。そういう側面だってある。ウサギが『側面』なんて言葉使うなんて、可笑しいねえ。あのさ、おいらだって、好きでここに来たわけじゃないんだ。あんたがおいらを呼んだんだよ

。そうなんだ。自分で認めようが認めまいが、あんたは毎週土曜日に、街を歩き回る理由を知りたいと思ってる。そこに答えがあるってことが分かってる。だからおいらを呼んだんだ。」

オサムは、ウサギの言葉の意味を、しばらく考えてみた。そしてこれはただの夢だ。夢の言葉に意味なんてあるわけがない。そう思った。ましてやこんなウサギを呼んだ覚えはない。目が覚めるまでの辛抱だ。ベレッタがあれば、このウサギを撃ち殺して目を覚ますのだが、あいにく夢の中には、銃を持ち込めなかったらしい。

「あんたの考えてることは分かるよ。おいらの言葉を、信じる気もないんだろう？ これは夢で現実ではないって。でもさ、現実の世界で見る夢だけがその世界に含まれないっていうのは、ちょっと不公平な考えじゃないのかな。そこに境界線みたいなものはないんだよ。ただその割合が変わっていただけなのさ。仮に、夢の世界が景色の大半を占めたって、ほとんどの人は気付きもしないんだ。なぜって、そのどちらもが現実の範疇にあるからさ。『範疇』だって。ウサギが『範疇』なんて可笑しいね。」

ウサギはそう言って軽くスキップを踏む。

「ともかく、あんたは穴を探している。それもとても熱心にね。そしておいらに助けを求めてきた。おいらが言えるのは、それは一人では見つけれないってことだけだ。目が覚めたら冷静になって考えてみなよ。もっとも、あんたはいつだって冷静だから、すぐに気づくはずさ。一緒に探さないといけない相手が誰かをね。よく考えるんだ。間違いは許されない。失敗したら、あんたは永久に半分のままだ。意味が分かるかい？ あんたはどんなことをしてでも、ユリを取り戻さないといけないんだよ。そのために穴はある。」

ウサギの言葉を合図にするように、オサムの足下が揺れ始める。ぼやけていた風景が渦になって、ウサギのタキシードの胸ポケットに吸い込まれていく。やがて暗闇の中にオサムとウサギだけが、宙に浮いている。

「いいかい、忘れるんじゃないよ。失敗は許されないんだ。」

ごうっという音がして、ウサギが目の前から姿を消す。オサムは目を閉じる。やがて音が消えて再び目を開けると、オサムは部屋のベッドで天井を見ている。

やはり夢だったのだ。

オサムは、ベッドの傍にある時計に目を向ける。「3 : 5 0」と赤く表示されたデジタルの時計。真ん中の「:」が、オサムにまるで警告を与えるように点滅し続けている。午前か午後の区別もつかなかったが、部屋が暗いところを見ると、午前なのだろう。

オサムはゆっくりと起き上がると、水を飲むためにキッチンへと向かう。コップに注がれていく水を見ながら、オサムはウサギの言葉を思い出している。

穴？ ユリを取り戻す？ 何のために？

くだらないと思いながらも、オサムはどうしてもウサギの言葉を忘れることができない。自分が、これまでとはまったく違う生き物になったように感じる。

俺はヤクザだ。ウサギの指図なんて受けない。いくらそう考えても、ユリのことばかりを考えてしまう。

オサムはカーテンを開けて、下を走る道を眺める。この時間に道を走っているのは、タクシーか大型のトラックだけだ。日付けはもう変わっている。水曜日だ。

土曜日まではあと二日ある。それまでに俺は、誰かに頼まないといけない。儀式に参加してくれるように。一体誰に？ そう考えてオサムは、はっと気がつく。

そうか、あいつしかいないか。

ウサギの言葉が頭をグルグルと回っている。

「失敗は許されない。しくじったらあんたは永久に半分のままさ。」

半分というのは、いったいどういう意味なのだろうか？ いくら考えてみたところで、オサムには見当もつかない。分からないが、オサムは穴を探すしかないのだろう。オサムは両手で顔を覆うと、深くため息をついた。

夜明けはまだ訪れない。

〈ユリとアカネ。タイムライン さらに過去〉

初めてユリがアカネの店に姿を現した時、アカネはひどく落ち込んでいた。

店を出して間もない頃で、店の切り盛りにもまだ慣れていなかったし、自分のセンスが街に受け入れられないことに、フラストレーションを抱えていた。

注文書通りに市場から花が届かず、ある時には、菊の花が大量に送られてきたこともあった。業者はそのことを詫びるどころか、注文の仕方が悪いのだと言って、アカネを責めた。

気味の悪いホストが一人、アカネにしつこく付きまとっていて、店に度々姿を見せては、花も買わずに「やらせろよ、アカネ」と言い寄ってきた。口をきくのも嫌だったので無視し続けていたら、今度はそのホストに入れ込んでいた女が店に乗り込んできて、「あんた、なに人の男に手出してんのよ。花屋は花だけ売ってりゃいいのよ！」と言って店の中をメチャクチャにして帰って行った。

床に散らばって踏みつけられた蕾を拾い集めながらアカネは、もう無理かもしれない、店なんか始めたのは間違いだったんだ。そう 思った。

そんな時、ユリが店にやってきた。その頃ユリは違う店でホステスをしていて、店の飾り用の花を買ってから出勤するところだった。

「その白い百合をちょうだい。」

ユリはそう言って、店の冷蔵庫の中のオケを指差した。

「白でいいんですか？」

アカネは、ユリを見てそう言った。白い花だけを買う客は珍しかった。思わずユリの顔を見てしまう。初めて見る顔だ。おそらく歳はアカネと同じくらいだろう。湿り気を帯びたような、艶のある黒髪が、両肩の上に座っている。綺麗というよりは可愛らしい顔つきをしているが、少女のような、無垢な可愛らしさではない。何かを隠しているような、何かを知っているかのような色気がある。ホステス特有の色の濃いルージュはつけず、薄いピンクが塗られた口元は、自分だけの言葉で話すことを予感させた。

「そうよ。私、白い百合が好きなの。何色にも染まるけど、何者にも染まらない。そんな強さを感じる。きっとお父さんも、そういう意味を込めて名前をつけたのね。」

「お父さん？誰のお父さんですか？」



冷蔵庫から白い百合を抜きながら、アカネは言った。

「私のよ。私の名前よ。ユリっていうの。その花とおんなじ。でもこの街で何色にも染まらずに生きていくのは、なかなか勇気がいるわね。あなたもそう思わない？」

そう言ってユリもアカネの顔を見た。

アカネはユリと目が合って初めて、ユリの魅力が、瞳に全て凝縮されていることに気付いた。口元よりも雄弁に、瞳はとても深いところから、語りかけてくるようだった。

なぜだかは分からないが、アカネはユリの瞳を見て、小さい頃、冷蔵庫で冷えていた水羊羹を思い出した。お中元か何かでもらったやつだ。

ずっしりとした重みと、ギザギザのついた木の匙。蓋を開けると、深みのある色の羊羹が見える。それは一瞥しただけで「特別だ」ということがわかる色をしていた。ユリの瞳の色は、それと同じ色だった。とても魅力的で、深みのある瞳。

水羊羹のことを考えながら、百合の花を包み終わると、アカネはユリにそれを手渡した。

「ねえ、あなたこの店、いつからやってるの？私今日、初めて来たんだけど。」

「三ヶ月になります。いつまでできるかは、分からないけど、私には花しかないし。ただこの街は嫌いだけど。」

「ふーん。あなたが作ったんでしょう？そのアレンジ。」

ユリは店の隅に置いてあった、売れ残りの白い花のバスケットを指差してそう言った。

「私、このアレンジ好きよ。何ていうか、ちゃんと主張してるわよね。私はここにいる！それが分かる。ただ、この街のほとんどの人間には、それが分からないでしょうね。悲しいかな。私もこの街が大っ嫌いなの。」

「ありがとうございます。そう言ってくれる人がいるのは嬉しいです。本当に。」

それはお社交辞令ではなく、アカネの本心だった。

店を出る間際に、ユリはアカネの方に振り返った。そして、照れ臭そうに肩を窄めて微笑んで言った。

「ねえ、あなた、名前は何ていうの？私はユリ。さっきも言ったけど。」

「アカネっていいます。」

「夕陽の色ね。私夕陽も大好きよ。私のこと、ユリって呼び捨てにしていいから、私もあなたのこと、アカネって呼び捨てにして構わない？」

「いいですよ。」

「そう、よかった。じゃあ今日から私達は友達ね。また来るわ、アカネ。」

そう言ってユリは店を出て、人混みの中へと歩いていった。あっという間に、街がユリの姿を飲み込んでしまう。

「今日から私達は友達ね。」そんな芝居みたいな台詞も、ユリが言うとはごく自然なものに感じられた。

それからほぼ毎日、ユリはアカネの店に顔を出しては話をするようになった。新しく入ったホステスが、イノシシみたいな顔をしているの。とか、会って三十分で、お客さんにプロポーズされたの。とか。アカネはユリの話に、飽きることがなかった。アカネも少しずつ、自分のことを話すようになっていった。二人の関係は「友人」というよりも、まるで「同士」のようだった。二人は、この街に充満する、偽物の空気に埋れて窒息する前に、いつかここから逃げ出したいと心から願っていた。

ユリがいなければ、アカネはもっと早くこの街を出ていたと思う。ユリがいたおかげで、なんとか首から上だけを、汚れのない、正常な空気の中に繋ぎとめておくことができた。

〈シンイチ。タイムライン 現在〉

思い出せる一番古い記憶は、母親に背負われて神社のお祭りに出かけた時のことだ。

階段を上がる母の足元から、カランカランと音が聞こえていたのを覚えているので、母は浴衣を着ていたのだろう。お囃子の音がだんだんと近づくにつれ、綿菓子匂いが漂ってきて、シンイチは、「降ろして」と母に頼んだ。

茜色の夕陽が遠くの山々の間を染め、神々しさに圧倒されたシンイチは、急に怖くなった。母の手を探すと、夏の羽虫が、顔の周りにまとわりついてきた。繋ごうとした手で、羽虫を払いながら、ふと、階段の手すりに目をやると、紫の夕顔の花が、甘えるように鉄の棒に巻き付いていた。

次に思い出せる記憶の中で、シンイチは父親に殴られている。そいつは本当の父親ではなく、母が再婚した男だった。本当の父親の記憶は全くない。どこで何をしてる奴なのかも、知らない。母親も、シンイチに本当の父親のことを話してくれたことはなかった。

男は、シンイチを何度も何度も殴りながら、大声で叫び続けている。

「お前の母親はインランだ！ お前が腹ん中にいた時も、男が何人も、お前の母親の中に出たり入ったりしてたんだよ！ だからお前は濁ってんだ。ええ？ お前は濁ってるんだよ！ 分からねえのかよ！ この野郎！」

シンイチには「インラン」という言葉の意味も、「濁ってる」という理由も、よく分からなかった。殴られながらシンイチは、一度も泣かなかった。口の中が切れて、血の味がしても、吐き出さずに飲み込んだ。

その時母が側にいたかどうかまでは、覚えていない。

小雨がパラつき始めた新宿の街を、黒のセルシオが走り抜けていく。シンイチがオサムのマンションに向かっている。ハンドルを握りながらシンイチは、母親のことを考えている。何年も連絡を取り合っていないし、どこにいるのかも分からない母のことを。

女子大病院の角を曲がって、オサムのマンションの前に車をつける。携帯をポケットから取り出し、オサムに電話をかけようとして、動きが止まる。

二日前の夜、組の幹部の斎藤に、シンイチは呼び出された。組のこれからのことで、お前にも意見を聞きたいと言われた。斎藤は次の組長になる男だと、周りから思われていた。頭がよく、人脈も豊富だった。ただキレると歯止めがきかなくなる性格で、ヘマを踏んだ舎弟を、動かなくなっても殴り続けていたのを、シンイチは以前見たことがある。

それはシンイチに、義理の父親を思い出させた。

その夜は、斎藤と舎弟数人と飲み歩き、シンイチはしこたま酒を飲まされた。酒は強い方だったが、斎藤という有力者と一緒の席にいるという優越感もあって、シンイチはひどく酔っ払っていた。

「斎藤さん、すみません。俺ちょっと酔っ払っちゃって。大事な話があるって言ってたのに、申し訳ないっす。」

「いや、いくら飲んでもいいんだぜ。将来を背負う若手とこうやって腹を割って話すのも大事なことだ。これからは、そういうことを大事にしないといけねえな。そうだろ？」

「はい！」

舎弟たちが一斉に返事をする。

「すみません。気にかけてもらって。組のためにこれからも頑張ります。本当です。何でもしますから、俺。」

斎藤は声を出さずに笑いながら、シンイチのグラスに酒を注いだ。シンイチには場違いのような、高級クラブだった。その酒一杯だけでも、信じられない値段がするのは間違いない。

「シンイチ、実はお前に頼みがあるんだよ。なに、大したことじゃないんだがな。オサムのことだ。」

「え？ 兄貴がどうかしたんすか？」

「あいつは知ってる通り、誰とも話さないし、誰もよく素性を知らねえ。真珠貝だからな。そんな奴の下についてるお前はさぞかし大変だろうと思ってな。」

「そんなことないです。兄貴は無口ですけど、俺にはよくしてくれますし、他のヤクザ者にはないオーラみたいなのを持ってるから尊敬してます。下につけて本当によかったと思っています。どんなヤクザも兄貴の貫禄にはかなわないです。本当にそう思います。」

「それは俺も含めてってことかよ？」

斎藤が、少し身を乗り出してシンイチを睨む。舎弟達が顔を見合わせる。

「いいえ、いいえ、斎藤さんは別ですよ。すみません。そういう意味じゃないっす。斎藤さん

は次期組長って言われてる人だし、別格です。本当です。すいません。」

シンイチが慌ててそう言うと、斎藤はソファに深く座り直した。

「まあいいさ。シンイチ、俺はあいつと同じ幹部として、あいつのことを知っておきたいんだよ。交友関係とかそういうのをさ。あいつ女はいるのか？」

「今はいないと思います。何年か前にユリって女がいたんですが、そいつがいなくなってからは一人だと思います。」

「寂しいねえ。そのユリって女は今どこにいるんだ？」

「それは知りません。ある日突然消えちゃったらしいんです。」

「悲しいねえ。そのユリって女の行方を知ってそうな奴はいるか？」

シンイチは、両目を指で押さえながら懸命に思い出す。だいぶ酔っている。

「区役所通りの、花屋のアカネって女なら知ってるかもしれませんが。ユリと仲が良さそうだったし、兄貴もアカネのところに、ちょくちょく訪ねて行ってましたから。」

「そうか、分かった。ああ、それとシンイチ、オサムは毎週土曜日の午前中どこにいるんだ？誰かと会ってんのか？新しい女ができたとかよ。」

「女はいません。それは確かです。兄貴はなかなか話してくれなかったんですけど、どうやら土曜日のあの時間は、一人で散歩してるみたいなんです。新宿公園の辺りかな。オフィス街の辺りですよ。なんで散歩なんかしてんのかは、聞いてません。聞いたって教えてくれないですよ。きっと。」

斎藤はもう一度ソファから身を乗り出す。

「それは本当に一人ですか？」

「はい。兄貴一人だけです。俺もついてったことはないです。」

沈黙が流れる。斎藤は何かを考えを巡らせているようだった。しばらくして斎藤が口を開いた。

「そうか、ありがとよ。あいつに聞いたって答えちゃくれねえからな。ほら、もっと飲めよ。まだまだ足りねえよ。」

それが二日前の出来事だ。

いくらシンイチでも、一日経てば、斎藤が何かを企んでいることくらい理解できた。酒に負けてペラペラとしゃべってしまったことを、深く後悔したが、オサムにそのことを話すこともできなかった。自分にできることは、兄貴を守ることだけだと思った。

携帯を開いて、オサムに電話をかける。

「兄貴、下に車つけましたんで、いつでも降りてきてください。」

電話を切ると、シンイチはワイパーで集められた雨の雫が、窓を伝って落ちていくのを眺めている。

母親のことをもう一度考えてみたが、どうしても母親の顔が思い出せない。やがてシンイチは考えるのをやめて、深くため息をつく。

兄貴を守れるのは、俺しかない。そうシンイチは自分に言い聞かせた。



〈ウサギの夢。タイムライン 過去〉

「そろそろ起きて。もう夜明けだよ。山が見たかったんだろう？ 窓の外を見てごらんよ。」

遠くの方から、ユリにそう話しかける声がある。ボリュームを絞ったラジオの音を聞いているようだ。

「見てごらん。こんなに素晴らしい夜明けは見たことがないよ！」

今度は、ユリのすぐ耳元で声がある。

はっとしてユリは目を開ける。いつの間に眠ってしまったのだろう。最後の休憩所を出たところまでは覚えているが、眠りに就いた記憶がない。眠気は訪れないと思っていたのにと、ユリは不思議に思う。もう夜明けなのかしら？ 外を見ようとすると、もう一度ユリのすぐ近くで声がある。

「決断する時は、いつだって突然訪れるんだ。大抵の人は、その準備ができないまま、決断をしなくちゃいけない。当てずっぽうでもいいやと思っても、人は必ずその準備をしなかったことを後悔するのさ。後悔してるうちに、またすぐに、次の決断がやってくるってわけさ。」

ウサギはそう言った。

隣の席に目を向けると、ちょうどユリの方を向いたウサギと目が合った。真っ赤な二つの瞳。「不思議の国のアリス」に出てくるようなウサギで、左の耳が右より少し短い。ユリは何かを言おうとしたが、どうしても言葉が口からでてこない。

バスの車内は明るくなっているが、夜明けの明るさではない。ユリを入れて八人いたはずの乗客の姿は見え、よく見ると運転手もない。ユリとウサギだけを乗せて、バスはまるで雲の中のような真っ白な空間を、音もなく進んでいる。

どこを見ても日本アルプスなんて見えない。ただ真っ白なのだ。これは夢なのだろうか？

「おいらが夢の住人かどうかは、大した問題じゃないんだ。重要なのは、おいらが言う言葉を、あんたが信じられるかどうかってことだ。おいらは、あんたが決断をする前にここに来れた。それは本当に幸運なことなんだよ。穴が空く前に、おいらはあんたに話しかけることができた。」

ユリはウサギの言葉を理解しようとしたが、うまくいかない。自分が思考しているのかどうかさえも、よく分からない。

決断？ 穴？ 何のことだろう。

「もしおいらが現れていなくても、あんたは穴を見つけるんだ。それは、いろんな可能性が点在するこの世界の中で、たったひとつだけ確かなことなんだ。あんたがあんたであり続ける限り、あんたの目の前に、穴がぽっかりと姿を現すんだ。おいらが言いたいのは、その穴は決して怖いものじゃないってことさ。穴の先のことなんて考えなくていい。そこに入っても、今のあんたは消えないし、入らなくてもその穴は怒ったりはしないんだ。いいね？」

やはり夢なのだとユリは思った。そうでないとこんなことは起こらない。喋るウサギの夢なんて素敵だけれど、目の前のウサギはやけに落ち着き払っていて、とても低い声でユリに話しかけている。あるいは現実のようにも見える。

穴って何なんだろう？ユリは特定できない意識の中で、もう一度そう考えた。

「穴の先に何かがあるかっていうのは、あんたには分かるはずさ。そこにあるのは、全てだ。あんたが失くしたと覚えている全てが、その先にはある。それを取り戻せるかどうかは、あんた次第だね。おいらがどうこう言えるものじゃない。ただ、さっきも言った通り、穴に入らなくたって、あんたはあんたのままさ。失くしたものを何かで補えるかもしれないし、永久に失くしたままかもしれない。それはまた違う可能性の話さ。ほら、ビートルズも言ってるだろう？ 『L i f e g o e s o n』ってさ。選ぶとも選ばざるとも、人生は進んでいくのさ。可笑しいね。ウサギがビートルズだって。」

そう言ってウサギは声を出さずに笑った。ヒゲだけがピクピクと震えた。そして、「さて」という風にユリの方に向き直った。

「時間が来たみたいだ。分かったかい？ あんたは穴に入っても入らなくても、五分五分なんだ。取り戻すか失うかはね。何も考えずに、思うままにすればいいさ。誰もあんたを咎めたりはしない。道は乾いていて、いつでもあんたを待っている。それを忘れないで。じゃあね。」

ウサギがそう言うと、バスを包んでいた真っ白な景色も、バスそのものも、溶け出すように歪み始める。やがてそれが一つの流れになり、ウサギの胸ポケットに吸い込まれていく。暗闇の中に、ウサギとユリだけが浮いている。やがてウサギの姿も歪み始めて、ユリは暗闇の中で一人きりになる。

目が覚める。二度目の目覚めだ。

バスの中は暗いままだ。携帯の時計に目をやると「4 : 4 0」と表示されている。点滅する「:」が一秒ごとなのを確かめて、ここは現実なんだと自分に言い聞かせる。やはり最後の休憩所を出た後に、眠ってしまったようだ。

ユリはウサギの言葉を思い返す。不思議な夢だ。とても夢とは思えない。

窓の外を見ると、高速の降り口を告げる看板が通過していく。夜明けはもうすぐだ。  
顔を洗うために、ユリは席を立つ。バスの一番後方に洗面所がある。

ウサギの言葉を整理して、ゆっくり考えようと思いながら、中央の細い通路を進んでいく。バスの揺れで倒れないように、誰もいない座席のヘッドレストを掴みながら進む。

後で客の数もちゃんと数えておかなくちゃ、と思ったところで、ユリの足が止まった。

洗面所の目の前に、ぽっかりと黒い穴が空いていた

### 〈オサムとアカネ。タイムライン 現在〉

二人は、中央公園を抜けてビル街に入ろうとしている。桜の花は散り始めていて、足元には落ちた花びらが、風の形をなぞって舞い上がっていく。

オサムから、次の土曜日にちょっと付き合ってくれと言われた時、アカネは特にどこに行くのかも尋ねなかった。何か理由があるのだと感じたし、オサムがそれを言葉で説明できるとは思えなかった。

オサムのことは、ユリから話を聞く前から知っていた。店のビルの権利が、組に移ってから、時折オサムは、店に顔を出すようになった。シンイチを連れてくることもあったが、ほとんどは一人だった。一人で来るとオサムは、別に何を話す訳でもなく、店の花を眺めていた。アカネもオサムが、何も喋らず店にいることを、苦痛に感じたことはなかった。むしろオサムが店にいることで、いつも店に花を買いにきて、軽口を叩くホスト達が、借りてきた猫のようにおとなしくなったので、有難かった。

それは抜きにしても、オサムは他のヤクザとは根本的に何かが違う。それが何かを、言葉で説明するのは難しいが、アカネはそう感じていた。

ユリが、「オサムっていうヤクザと付き合うことになったの。どうしてそうなったかは、分からない。ただ彼が私の全てだってことが分かる。」と言った時、アカネはオサムのことを知っていると、なぜか言えなかった。

それからユリとオサムは、二人で店に来ることもあった。しかし特にユリはオサムを紹介したりはせず、いつものように、昨日あったことをアカネに話し続けた。それはオサムに気を遣ってなのか、アカネになのかは、分からなかった。

アカネは、オサムが以前から自分のことを知っていると、ユリに話していないことを知り、なぜか安心した。どうして安心なんてしたのだろうか？あるいはユリと同じ感覚を、オサムに抱いていたのかもしれない。しかしそれは確かめようもないことだと感じていた。ユリが幸せになれば、それでいいと思った。

一年ほどして、ユリが「オサムの元を離れるつもり、生まれ故郷の金沢に帰るの。」と言った。アカネは「そう、残念だけど仕方がないね」とだけユリに言った。

他に言葉が浮かばなかった。

「あいつが私の全てだってことは変わらないの。それは普遍的なものなの。でもね、普遍的な

ものだけでは、守っていけないものが確かにこの街にはあるのよね。あいつは心を見せない。でも心があることが私にはわかる。分かってはいるけど、どうしようもないの。」

ユリは疲れ切っていた。

アカネは言葉を選ぶことができずに、ただ彼女を見ていた。そのうち客が入ってきて、店が慌ただしくなった。

「じゃあね、アカネ。落ち着いたら連絡するわ。金沢にもいつか遊びにきて。」

そう言ってユリは店を出て行った。それっきりユリは店には現れなかった。オサムは以前よりは少なくなったが、相変わらず店に姿を見せた。アカネはユリのことを尋ねなかったし、当然オサムからその話をすることもなかった。

それにしても、オサムはどうして自分を選んだんだろう？ アカネは不思議に思う。オサムと自分は、全く別の世界で生きている。オサムが無口な男で、自分の生きる世界には頼める相手がいなかったとしても、アカネが選ばれる理由はあまりないはずだ。理由があるとすれば、そこにはユリのことに関係しているに違いない。二人を繋ぐものは、それしかないからだ。

数日前、オサムの組の奴らが店にやってきて、しつこくユリのことを聞かれた。知らないと言いつ張ると、「下手な嘘をつくとか、商売できないようにさせてやるぜ」と言って脅された。実際ユリから一度も連絡はなかった。金沢に帰ると言っていたが、それが本当かどうかなんて分かるはずもなかった。組がユリを探しているのは、間違いなくオサムにも関係があるからに違いない。

そのことをアカネは、隣を歩いているオサムにどう切り出そうかと考えていると、オサムが先に口を開いた。

「ユリはお前には何でも話せるんだと、いつも言っていた。私たちだけがこの街を包む毒ガスのような腐臭から身を守っているんだと。俺にはそれがどんな臭いか見当もつかなかったが、お前はどうか？ やっぱりそう思っていたのか？」

アカネは驚いた。オサムがそんなに長い言葉を口にするのを初めて聞いた。

「そうですね。ある意味では、ユリと同じ考えでした。でも私の場合はユリと違って、強い流れの中にいるということがなかったんです。ユリはなんていうか、存在すること自体にうねり、みたいなものがありました。それを自分でも分かっていた。そのうねりは、どうやってもこの街にはすぐわかないものでした。本質的過ぎたんです。そのズレに彼女はイラつき、助けを求めていました。それを受け入れてくれると信じるのができたのが、オサムさんだったんじゃないんですかね。今となっては分かりませんが。」

アカネも饒舌になっている。

「どうして急にユリのことを？ この誰もいない界限を歩き回るのは、ユリのことを誰にも邪魔されずに考えたいからですか？ どうして私にそれを共有させようと思ったんですか？ 私を通してセンチな感傷に浸りたいから？」

アカネは一気に言葉を吐き出す。相手がヤクザということも忘れて。

オサムは何も答えず、アカネの言葉について考え込んでいるようだった。長い沈黙のまま、ビルの合間を二人は歩いて行く。

「アカネ、悪かったな。もういいんだ。もうやめだ。こんなことしても何の意味もない。実は随分と長いこと、こうやって歩いてきた。意味のないことくらいは自分でも分かってたつもりだった。だがな、お前と一緒に歩いてみて分かった。俺は意味を求めている。それでいいんだ。」

「オサムさん、それは私がそうさせたって意味にもとれますよ。オサムさんが頑なに守っている範囲みたいなものがあるってというのは、わかります。感じます。ただそれを守るために、私を口実にしないで欲しい。ユリは言っていました。オサムさんの心があるのがわかる。どんなに真珠貝って周りから言われようと、私にはそれを感じることができるって。オサムさん、本当に自分の世界だけを守りたいなら、触れないで欲しかった。ユリに...」

もう一度、オサムは考え込んでしまう。おそらくこういう会話が、ユリとの間でも交わされていたに違いない。

「ウサギが言うには...いや、何でもない。」

「ごめんなさい。私、何だか口が過ぎたみたいですね。どうしちゃったんだろ。私。どうしてここを歩き回るのが、理由は聞きません。これで終わりと言うならそれでいいと思います。ユリのことはもう二度と...」

アカネの言葉がそこで途切れる。オサムも歩くのをやめてアカネを見る。しかしアカネとは目が合わない。アカネはオサムの真後ろのビルの、二階あたりに視線を向けている。オサムも振り返って視線の先を見た。

「どうした？ アカネ」

「あそこ、あの二階の三番目の窓で、私に手招きしてた。間違いなく。ユリ、だったと思います。」



そう言ってアカネは、ビルの外階段に走る。

「おい、待て、アカネ！ そんなわけないだろう！」

アカネは二階に駆け上がり、非常ドアを押す。ガチャっという音がしてドアノブが回る。何のつかえもなくスムーズにドアが開く。廊下を走り、外から見えた位置にある部屋のドアの前に立つ。表札には何も書かれていない。恐らく、今は何の会社も入っていないのだ。

ノブに手をかけた時に、オサムが追いついてくる。アカネがノブを回そうとすると、ドアがひとりだけで部屋の中へと開く。ひとりで

に。  
アカネとオサムが部屋の中を覗き込む。

オフィス用品も何もない、がらんとしたその広い空間のちょうど真ん中に、ぽっかりと黒い穴が空いていた。

〈シンイチ。タイムライン 現在〉

歌舞伎町は午前中にも関わらず、すでにどこからともなく現れた人々で、溢れかえっている。横断歩道の信号待ちが邪魔をして人々は歩道から車道へと弾き出されている。幸運にもそれを免れた人々も、まるで牛の歩みのようだ。

シンイチが人並みをかき分けて、必死に前へ進んでいる。しかし、なかなか思うように進むことができない。覚醒した街のうねりが、シンイチを後へ後へと、押し戻そうとしている。

「どけえこら！ 邪魔なんじゃボケ！」

シンイチが叫ぶ。

しかしいくら叫んでも、道は拓かれない。早くオサムの元へ行かなくては。シンイチは焦りながら、オサムにもう一度電話をかけてみる。さっきから何度もかけているのに、オサムは電話に出ない。悪い予感がする。

斎藤が、こんなにも早く動くとは思わなかった。迂闊だった。

今朝シンイチは、事務所にいた斎藤の舎弟を一人捕まえて、外へ連れ出し、斎藤の企みを聞き出そうとした。この間の酒の席にも同席していた奴だった。問いただすと、しらばっくれて何にも話さないの、殴りつけた後、銃を突きつけて脅した。オサムと同じベレッタだ。

斎藤は今日、オサムを殺る気だ。

他の組の奴らに頼んで、自分の手は汚さずに。見返りに斎藤は、そいつらがかねてから欲しがっていた大久保のシマを渡す条件だった。表向きは敵対している組の奴らとも、斎藤は太いパイプで繋がっていた。

「シンイチ、てめえこんなことしてタダで済むと思ってんのかよ！」

「うるせえ！ 斎藤さんがそんなことしたら組長が黙ってねえだろうが！ 下手すつと戦争だ。そうなったら、斎藤さんにも何の得もねえだろうがよ！」

「大久保のシマを仕切ってるのはオサムさんだ。そのオサムさんが、シマを譲る代わりに金を要求してたってことにすりゃあ組長だって手を出すのは難しい。スジを通すために大久保を渡して、丸く収めた方がリスクはねえ。」

「そんなこと、組長が信じるもんか！ 兄貴は組長から信用されてんだ。あいつらの言葉なんて聞きもしねーよ！」

「どっこいそこで斎藤さんが言うんだよ。最近のオサムさんの行動が怪しかった。調べさせたら、毎週土曜日に人目のつかない場所で誰かと会っているようだった。ユリって女の元に逃げるために、金が必要だった。その証拠をつかむ前に、金を要求された方が先手を打ってオサムさんを消しにかかった。ってよ。そうすりゃ組長だって信じるしかねえ。手持ちの駒のために、組全体を危機にさらすような真似はしねえさ。」

「汚ねえ。汚ねえよ！ そんなこと許さねえ！ 許される訳がねえ！」

「てめえが許さなくても関係ないのさ、斎藤さんは、オサムさんのことが邪魔だったんだよ、ずっとな。誰とも馴染まねえあの性格が、いつか組の癌になると思ってたのさ。まかり間違っ、オサムさんが次の組長にでもなるようなことになれば、組は潰れちゃうっていつも言ってた。まあこんな話、てめえみたいな淫売の息子に話しても、しょうがねえけどよ！」

シンイチは、そいつの腹を思い切り蹴り上げ、うずくまったところへ銃のへりで思い切り頭を殴りつけた。そして、よろめいて地面に倒れこんだそいつの顔を、気を失うまで踏み続けた。

息を切らしながら、シンイチはオサムに電話をかける。しかしいくら待っても、誰も出ない。車は少し離れたところにある。ここからだったら、走った方が早くつくに違いない。シンイチはベレッタをしまい、西新宿に向かって走り始めた。

街は土曜日だった。人混みが邪魔することまで、シンイチには読みきれなかった。しかし、今さら車を取りにも戻れない。

いつもそうだ。大事な時に俺は、判断を間違える。それは俺が濁っているせいなのか？

いつまでたっても俺は濁ったままなんだろうか？ 兄貴、そんなことないですよ。どうか無事でいて下さい。いますぐ行きますから。どうか無事でいて下さい。

シンイチは泣いていた。叫びながら泣いていた。すれ違う人々は、気味の悪いものを見るような視線を、シンイチに浴びせていた。それがどういう感情の涙なのか、シンイチにはとうとう分からなかった。

歩道橋の下を走り抜ける。公園を右に見ながら、ビル街の方へと向かう。息を切らせながらシンイチは叫び続ける。

「どけえこら！ 邪魔なんじゃボケ！ 道を開けねーか！」

## 穴。タイムライン 過去

---

### 〈穴。タイムライン 過去〉

目の前に現れた穴を見て、ユリは動くことができない。きっとまだ、夢の中にいるんだと思った。それと同時にウサギの言葉が、ユリの頭の中でグルグルと回り続けている。

「それは決して怖いものじゃない。その先にはあんたが失った全てがある。」

そのうちにユリは、これが夢でも現実でも構わないと思い始める。そしてその穴を、信用し始めている自分がある。恐怖はない。逆に恐ろしいくらい冷静に、ユリは穴を見つめている。どれくらい深いのか見当もつかない。穴の中と外では、流れている空気の質までが違っているように見える。バスの外を包んでいる、漆黒の闇とは明らかに違う。もっと濃度の濃い闇が、そこにあった。

ユリは穴のすぐ前まで歩み寄り、右手をゆっくりと穴の中に入れてみる。ひんやりと冷たく、湿った感触がする。地下室で感じたことがあるような感触。それを感じたのは幼い頃か、大人になってからなのか、ユリには思い出せない。

「オサム」

小さくそう呟くと、ユリは思い切って穴の中に入っていく。やがてユリの全てを穴が飲み込み、ユリは完全に穴の中へと消えてしまった。

バスの中には、エンジン音だけが鳴り続けている。窓からは白み始めた空に浮かぶ様に、日本アルプスの山々の輪郭が姿を現していた。

## 穴。タイムライン 現在

---

〈穴。タイムライン 現在〉

二人は、目の前の黒い穴を見て、言葉を発することができない。その穴が何なのか、アカネには見当もつかない。

ゆっくりとフロアを見渡すと、コーヒーカップが一つと、以前ここに入っていたのであろう会社のパンフレットが、数冊床に散らばっている。それだけだ。

抜け殻のようなその部屋の中で、穴だけが生の力を帯びているようだ。

アカネがオサム顔を見る。僅かではあるが、確信的な表情をしている。

オサムは知っているのだ。この穴が何なのかを。この穴を探すために、オサムはずっと歩き回っていたのだと、アカネは理解する。

「オサムさん、これは、何なの？」

「これは、入口だ。その先には、俺が失った半分がある。」

「一体何の話？ 半分って何のこと？」

オサムはそれには答えずに、穴の方へと近づいていく。

「待って！ オサムさん！ いけない！ 危険だわ！ その中へ入ってはいけない！」

「大丈夫だ、アカネ。ウサギが言ってた通りだった。失敗は許されない。お前は穴を見つけてくれた。後は俺が見つかるだけだ。ありがとよ、アカネ。」

「ウサギって何？ ねえ、オサムさん、駄目だって！」

オサムは、穴の中にゆっくりと右足を入れ始める。それはまるで、川の清流に素足をつけて涼んでいるように見えた。

「ユリ」

そう呟いて、オサムは穴の中へ一気に身体を投げ入れた。黒い穴はオサムを飲み込んで、オサムは完全に消えてしまった。アカネ一人だけが、残されてしまった。

アカネは何かを叫ぼうとしたが、どういう訳か、どうしても声が出てこない。気が付くと部屋の輪郭がぼやけ始め、色を混ぜたパレットのような風景が、目の前に広がっている。床を見ると、いつの間にか黒い穴は消え、それがあった場所にも、ぼやけた風景が侵食し始めている。

アカネは恐怖のあまり目を閉じた。震えながら、ただ全てが過ぎ去るのを待ち、祈り続けた。

不意に、目を閉じているアカネの頭に、失踪した占い師の女が、イメージとなって現れた。そして繰り返し、アカネに語りかけている。

「お前には大事な役割がある。その時がきたら、それを逃すんじゃないよ」

どれくらい時間が経ったのだろうか。時間という認識がない世界に、確かにアカネはいたような気がする。ゆっくりと目を開けると、そこは同じ場所だった。

西新宿のビルの無人フロア。オサムが穴の中に消えた場所。床に散らばっている、コーヒーカップとパンフレット。全部同じだ。

ただ、穴だけが消えてしまっていた。

急に背後に気配を感じ、恐る恐るアカネは振り向いた。

オサムとユリが、静かにアカネを見ていた。



〈ユリの出口。タイムライン 交錯地点〉

「ユリ？ 本当にユリなの？」

アカネはやっとの思いで、そう口にした。

ユリもオサムも、相変わらず何も言わずにアカネを見つめている。穴の中に飲み込まれ、消えたはずのオサムがそこにいて、ここにはいないはずのユリまでもが姿を現した。

アカネはひどく混乱していた。それを落ち着かせるように、ユリが微笑みながら口を開いた。

「アカネ。私、戻ったわ。ううん、こっちへ来たわって言った方がいいのかもね。ありがとう、アカネ。あなたのおかげよ。」

オサムは何も言わずに、二人のやりとりを、ただ静かに聞いている。ユリが言葉を続けた。

「アカネ、いい？ これで良かったの。これからここで起こることは、決してあなたのせいじゃないの。それだけは確かよ。私は取り戻せたわ。そして抜け出したの。あの街から。全てから。オサムが私を見つけてくれたから。それだけでいいの。だからアカネ、自分を責めたりはしないでね。約束よ。」

アカネはユリの言葉を、一語一語確かめてその意味を理解しようとした。しかし、歪んだ景色の残像が邪魔をして、なかなかうまくいかない。

突然、部屋の中に男が二人、駆け込んでくる。どちらも片手には銃を持っている。

「死ねや！」

そう叫ぶと、男たちはオサムに銃口を向ける。するとユリが、ユリがオサムの前に立ち、オサムの肩に手を回した。

四発の銃声。

床に倒れ込むユリの口から、真っ赤な血が溢れ出してくる。オサムはユリを抱えながら、胸元のベレッタに手を伸ばす。

その時、部屋の入り口に、もう一人男が姿を現す。シンイチ。

「うわあああ！」

叫びながらシンイチは、ユリを撃った二人の男たちに、銃口を向ける。男たちは振り返って、今度はシンイチに狙いを定める。

六発の銃声。

男たち二人が、床にうつ伏せと仰向けに倒れる。ゆっくりと鮮血が床に広がっていく。二人は倒れたまま、ピクリとも動かない。オサムのベレッタから、硝煙が立ち上っている。シンイチは銃を投げ出し、腹のあたりを押さえながら、ドアに寄りかかって腰を落とす。じんわりと、赤い血がシャツを染めていく。

アカネは呆然と立ちすくんだまま動けない。全てが一瞬の出来事だった。ユリの言葉を理解する前に、ユリは撃たれてしまった。

ただ、ユリはこうなることを知っていた。そして恐らくはオサムも。どうしてかは分からないが、二人には分かっていた。

アカネがユリの元へ駆け寄る。

「ユリ！ ユリ！」

オサムの腕に抱かれながら、ユリはまるで、何の痛みも感じなかったように、穏やかな顔をしている。オサムもまた、覚悟をしていたかのように、表情を変えなかった。

アカネはユリの頬に手を添えようとした。その瞬間、不思議なことが起こった。

ユリの体が、音もなくだんだんと透け始めた。やがてユリを支えていた、オサムの手が見えるようになると、フッと、ユリの体は消えてしまった。まるで、初めからそこにはいなかったかのように、ユリはいなくなってしまった。

再び呆然としているアカネを見て、オサムが小さく首を振った。そして抱き抱える形の手を解いて、ゆっくりと立ち上がると、シンイチの方へと近づいていった。

「兄貴、すみません、兄貴たちがこ...このビルに入るのが見えて。追っかけたんです。でも、先を越されちまって。俺、知ってたんです。さ...斎藤が兄貴を狙ってるって、し...知ってたんです。それなのに。すみません。」

シンイチの腹から、湧き水のように、どンドン血が溢れ出している。

「しゃべるな、シンイチ。いいんだ、全部わかってる。お前は何も悪くない」

「俺、お...俺は、兄貴のようなヤクザになりたかったんです。何もい...言わなくても、誰もが一目置くような、兄貴のようなヤクザにな...なりたかったんです。」

シンイチが血を吐く。

「で...でも俺は、濁ってるから。無理なんです。濁ってるから。」

「シンイチ、もういい。しゃべるな。」

オサムはそう言って、シンイチの肩に手をかける。

「兄貴、も...もう何も感じない。い...痛みも、何も。あーあ、あいつ、ほ...本気で殴りやがって。母ちゃんが泣いてんじゃねーかよ。な...泣いて...」

シンイチはそれっきり口を開かなかった。溢れたシンイチの血が、床を伝ってオサムの足元まで流れていた。オサムはシンイチの肩から手を離し、立ち上がると、ゆっくりとため息をついた。

その部屋は、また、オサムとアカネの二人だけになった。僅かな時間の間に、何人かが現れ、消えていった。アカネはまだ、何が起こったのかを理解することができなかった。

アカネはオサムを見た。オサムは泣いていた。声をたてず、まるで汗をかくように涙を流しながら、オサムは泣いていた。

〈ウサギの夢。タイムライン 半分の現在〉

アカネは夢を見ている。

ウサギがそこに現れることは、夢を見る前から分かっていたような気がする。しかし、いざウサギが現れてみると、アカネはどこから話し始めたらいいいのか、全く分からなかった。アカネの言葉を待たずに、ウサギが先に口を開いた。

「何も言わなくていいよ。あんたはうまくやったさ。でき得る限りのことをね。あんたの役割ってというのは、繋ぐことじゃなくて、全てを見届けることだったんじゃないかな？ユリは消えてしまったけど、それは多面体の一部でしかないんだよ。ウサギが『多面体』なんて可笑しいだろう？」

「じゃあ、多面体の違う一部では、オサムさんとユリは一緒にいるの？そこには私もいるの？」

「驚いた。やっぱりあんたは、おいらと話ができる人間だったんだね。そう。ユリとオサムが、一緒になるという一部だって存在する。一つの未来が、一つの過去を確定させる訳じゃないんだ。そこにはいろんな要因があって、複雑に絡み合ってる。理屈だけで全てを説明することなんてできないのさ。」

「じゃあ私たちは、何を目印に進んで行けばいいの？ そんな気まぐれな世界に放たれて、好き勝手にされたら、途方に暮れてしまうわ。」

「そうだね、その通りさ。この世界は自分勝手に気まぐれさ。おいらに言えることはあまりないんだけど、目印があるとすれば、今、あんたがいるその場所しかない。気付いていないだろうけど、誰も先になんて進んじやないんだよ。今いる場所を見つけるのが精一杯なのさ。時にはそこに、穴が空くことだってあるだろう。でも穴の先も、今いる場所ではないんだ。ちょっとややこしいかな？」

アカネとウサギの周りには、何もない。真っ白な空間で話をしている。そこはアカネの世界であり、オサムとユリの世界でもあった。

「あんたも道を選んだようだね。その先にもその前にも、何があるかは誰にも分からない。まあしっかりやんなよ。おいらはいつでもここにいるからさ。たまには遊びに来てよ。それじゃあね。」

そう言ってウサギはアカネに手を振った。  
最後にふと見ると、ウサギの右の耳が、左より少し短いようにアカネには見えたが、すぐにウサギの姿は見えなくなってしまったので、確かめることはできなかった。

電車が急なカーブで揺れて、アカネは目を覚ました。車内アナウンスが聞こえてきて、東北は今が桜の季節だというようなことを言った。まだ山形に入ったばかりのようだ。

新宿の店を畳むことになり、新潟の知り合いを頼って、花の教室を手伝うことが決まっていた。

「アカネ、お前はすぐにここから離れるんだ。そして何を聞かれても知らないと言え。俺がお前といることは、誰も知らない。いいな？ 何があっても、俺のことなんて口にしないぞ。」

オサムは、あの日、アカネにそう言った後、行方を眩ませていた。組の連中が血眼になって居場所を突き止めようとしていたが、まだ見つかっていない。

ユリが消えた三日後に、クラブから出てきた斎藤が、何者かに襲われた。待ち伏せされて、車に乗る瞬間に頭をぶち抜かれた。一緒にいた舎弟も、みんな殺された。唯一生き残った運転手が、やったのは間違いなくオサムだったと証言した。

俄かに街が慌ただしくなり、ぎすぎすした空気が流れていた。その日以来、アカネにとって新宿の街は、より一層生きづらい街になってしまった。ユリもオサムも、もうそこにはいなかった。頃合いだと思った。

そしてとうとう、オサムはアカネの前には、二度と姿を現さなかった。

電車がトンネルに入り、窓にアカネの顔が映る。まじまじと点検するように、アカネは自分の顔を覗き込む。

これは本当に自分の顔なんだろうか？ アカネは自信が持てなくなる。これから先も、二度とオサムと会うことはないだろう。しかしどこかで、中央公園をオサムと歩き回る自分も、確かに存在するに違いない。

「いま私はここにいる。」

アカネは口に出して、窓に映った自分自身にそう言い聞かせる。そして少し、ユリのことを考えている。

〈オサムの出口。タイムライン 新しい過去〉

バスの中は、昇り始めた日の光で、随分と明るくなっている。ユリはその光に射抜かれて、眠りから目覚めようとしている。

インターを降りて、市街地に入るバスの外には、雪一色に染められた田園の風景が広がり、遠くには巨大な鉄塔が、たゆんだ送電線の中継しているのが見える。

ユリは目を開けて、その風景を眺める。そして隣の席に座る、オサムの手をしっかりと握る。オサムもその手を握り返す。

あと一時間もすると、金沢に到着する。

「ねえ、オサム。私たちの未来は、もう決まっているのかしら？ 穴が完全に一つの流れなんだとしたら、私は、そう長くは生きられないってことになるわよね。それは怖いことだわ。」

「どうなんだろうな。流れているなら、その未来も同じ早さで流れてくんだろ？ だったらそこには、永久に追いつかないってことなんじゃないのか？」

「いいの。いまここに二人でいることだけを信じていたい。私にはそれだけでいい。」

そう言ってユリは、オサムの肩に頭を預ける。

車内放送が流れて、到着時刻をアナウンスされる。眠っていた他の客たちも、背伸びをしたりして、準備を整えている。

これからどこへ行けばいいんだろう？ オサムには何も考えることができない。しかし思えばこれまでだって、何も考えずに、流れるままに生きてきた。ただ、今はその流れの中にユリが含まれている。そして自分もユリに含まれていると感じる。

気まぐれで不確かな世界なのであれば、せめてその感覚だけを頼りにするのも悪くはないな。そう言いかけて、オサムは思い留まる。

言葉になど、する必要はない。